

《論 說》

編集著作物における編集著作作者認定の一基準

五味 由典

目次

- 一、はじめに
- 二、『智恵子抄』編集著作権確認訴訟
 - (一) 事実の概要
 - (二) 控訴審判決
 - (三) 最高裁判所判断
 - (四) 最高裁判所判断と高裁判断の差異
- 三、「智恵子抄」事件と「地のさざめごと」事件
- 四、編集著作物の特質
 - (一) 編集著作物成立に関する旧法と新法の差異
 - (二) 編集者の編集行為の限界
 - (三) 二次的著作物としての編集著作物
- 五、まとめ

編集著作物における編集著作作者認定の一基準（五味）

一、はじめに

著作権法は、編集著作物について、「素材の選択または配列によって創作性を有する」著作物を編集著作物とする（同法一二条一項）との定義規定を置くのみで、編集著作物については、特に規定を設けていない。しかし、編集著作物は、そこに収録されている著作物に付随する著作権とは無関係に編集著作権が発生することから、編集著作物についての著作者の認定は、一般の著作物におけるそれと同様、「著作物を創作する者」（同法二条一項二号）が編集著作権の主体と認めらる⁽¹⁾。編集著作権の帰属先を議論する場合、このことは、当該著作物が、編集著作物としてふさわしい創作性を有するか、有するとすれば、その創作行為は誰によって為されたのかというように、編集著作物としての創作性の問題と編集著作物の著作権が誰に帰属するかという問題とは表裏一体の関係にあるといえよう。今日まで、判例は前者の判断についてのものが多かった。これは、第三者の行為がいわゆる真似なのか、オリジナルなのかの争いのなかで、被侵害物としての編集著作物の著作物性が問題となったからである⁽²⁾。しかし、近時出された判例の中には、編集著作権者に限らず、著作権認定に関するものが多く見受けられる⁽³⁾。

編集著作物には、既に公刊された様々な著作物を収録する場合が考えられる。それは、文学的な著作物をまとめる作品集や詩集等の他にも、地図や図表、著作権の対象とならない単なる雑報や住所、あるいはそれらの複合により作成される場合もある。その中でも、文学的著作物を収録対象とした編集著作物の著作権者決定に関しては、他の編集著作物（データベース）などとその性質を異にし⁽⁴⁾、素材とされる個々の作品自体に、著作物性があることから問題が

複雑となる。近時、最高裁判所で出された『智恵子抄』編集著作権確認訴訟事件⁽⁵⁾は、編集著作物認定に関して画期的な判断をくだすものとなった。本稿では、同事件について詳細な検討を行い、それ以前に出された我国における判例との関係を検討したうえで、著作者認定にかかわる問題点を指摘し、その認定基準について考察を行おうとするものである。

二、『智恵子抄』編集著作権確認訴訟

（一）事実の概要

詩集『智恵子抄』（以下、単に「智恵子抄」とする。）に関する編集著作権確認訴訟の概要は、概ね次のようなものであった。

高村光太郎（以下、「光太郎」とする。）の著作に属する詩及び短歌等を収集した「智恵子抄」は、昭和一六年八月二〇日、澤田伊四郎（以下、「澤田」とする。）が昭和八年に創設した出版社龍星閣のもとから出版された。澤田は、光太郎の様々な詩歌に感動を覚えたことから、既に出版済みの詩集『道程』をそれらと合わせ読むようになった。そこで彼に対する認識を新たにした澤田は、詩人としての光太郎に注意を払い、彼の詩の掲載された雑誌、新聞等を積極的に集めるようになった。

そこで、昭和一四年三月及び四月の二度にわたり、澤田は、光太郎に対し智恵子をテーマとした第二の詩集を出版させて欲しい旨の申し出を行ったが拒絶された。さらに、『道程』の改訂版が出版された昭和一五年一月二〇日の

翌月にも、自ら作成した「智恵子抄」(当時仮称)の第一次案を光太郎のもとに持参し、再度、出版を申し入れたが、それでも承諾を得られなかった。

この事件で争点となった、澤田の第一次案は、光太郎の処女作である『道程』に収録されている作品を中心に、智恵子の生涯を浮き彫りとしようとしたもので、その具体的配列は、基本的に『道程』にそいながらも、澤田が収録意図にそぐわないと考えた「あをい雨」、「梟の族」及び「冬が来る」などの作品を除外し、それ以外の作品は、それに掲載された順序に配列されていた。そこには『道程』に掲載された作品を掲載し、次にそれ以外の雑誌等で掲載された詩、散文の順に配列してあった。しかし、この第一次案は、当時広く普及していた刊行物に収録されている智恵子に関する作品や彼女に関する作品であると気付かなかった作品などは収録されていない、比較的粗雑なものであった。第一次案は、光太郎に交付され、出版について彼の許諾を得られないまま、彼が預かることになった。

その後、光太郎は次第に智恵子に関する作品を編集著作しようと思いはじめ、自ら、手元の詩稿をはじめ全集等の全作品を対照に取捨選択、整理しつつ、智恵子の亡骸を主題とした「荒涼たる歸宅」の制作に着手、昭和一六年六月一日、同詩は完成をみた。控訴審の事実認定によると、同月一六日から二〇日までの間に電話で澤田に「あれをやるうじゃないか。」と智恵子に関する作品の編集著作及び出版意思を澤田に告げている。さらに、以前澤田から受けていた第一次案を澤田に返却すると同時に、光太郎は、自らの手元にあった詩稿等から、「夜の二人」、「人生遠視」及び「荒涼たる歸宅」の各詩、短歌の中から六首を選択し「うた六首」とし自筆原稿を、「同棲同類」、「美の監禁に手渡す者」の二編についてはそれが掲載されていた雑誌の切抜きもそれぞれ手渡した。そしてこれらを新詩集へ

収録するように指示をした。加えて、第一次案の中で題名だけが挙げられていた詩「あなたはだんだんきれいになる」については完全な詩稿を手渡し、制作年月日及び発表年月日が不明であった作品の制作・発表年月日を確定した。その際に、澤田の方からは、編集著作及び出版告知後、澤田が智恵子に関する作品であることに気付いた、「狂奔する牛」、「鯨」、「九十九里濱の初夏」についての選択を光太郎に進言して、光太郎もそれらの収録を決断した。そして、当初澤田の作成した第一次案に新たな作品及び確定された各詩の制作年月日に基づき、厳密な作業のもと制作年月日順に作品が再配列された。「荒涼たる歸宅」については、作品の性格から、制作年月日順という原則を崩す配列をとった。なお、澤田が、光太郎から返却されたこれら各詩及び散文については、既に光太郎によって綿密な推敲がなされ、「ちゑ子」、「千恵子」などの不統一な表記は「智恵子」に統一されていたり、必要な加筆・変更が加えられた後であった。

澤田は、光太郎からの編集著作の意思表示を受けてから一週間ないしは十日後に、彼の指示通りに配列したものを紙挟みのようなものに挟んで光太郎のもとに持参した(澤田の言うところの第二次案)。そこで最後に、光太郎は、「淫心」及び「婚姻の榮誦」については、収録しない旨澤田に伝え、第二次案から両詩を除いたものが「智恵子抄」となった。そして、「智恵子抄」は澤田から出版許諾をうけた龍星閣によって、昭和一六年八月二〇日に印刷、出版された。⁽⁶⁾

(二) 控訴審判決

編集著作物における編集著作作者認定の一基準(五味)

原審において澤田の編集著作権が否定されたことを不服とし、控訴したものが東京高裁判断である。ここでは、次の二点を理由に控訴がなされた。⁽⁷⁾

まず第一の理由として、光太郎が澤田に対し、①「あれをやるうじゃないか」と言って澤田を呼んだこと、②第一次案を澤田に返還したこと、③制作年月日を朱筆した五編の詩及び「うた六首」の肉筆原稿、並びに「同棲同類」及び「美の監禁に手渡す者」の二編の詩を掲載した雑誌の切抜きを編綴しないまま澤田に手渡したこと、④「人に」(遊びじゃない)を第一次案から削除することを澤田に求めたこと、などの行為をなしたとしても、それらが、澤田の第一次案によって提示された詩集上の構成と完成した「知恵子抄」とでどの様な点において異なる創作性が認められるのかが不鮮明なこと。それらの行為のみをして光太郎の編集行為の一貫と位置づけることはできず、光太郎を編集著作権者と認定する根拠に明確性が欠けているという理由である。

第二に、完成した「知恵子抄」と第一次案とを比較すると、その内容にみられる詩集としての特質(構想や構成方法)が両者に共通していること、第二次案は「婚姻の榮誦」と「淫心」の二編の詩が収録されている以外は完成した「知恵子抄」と収録作品及び配列において一致していること、また第二次案の内容上の特質が第一次案と共通しているという事実は、第一次案が澤田の独創に係るものであることに疑問の余地がない以上、第二次案も澤田の独創に係るものとみるのが常識と合致する。したがって、澤田に編集著作権が帰属する、との理由からであった。

これらに対して、東京高等裁判所は、①光太郎の編集行為の認定について、「光太郎が『荒涼たる歸宅』の制作を完了したのは昭和一六年六月一日であるとしても、同詩の着想、推こうはそれより以前になされていたと推認する

のが相当であり、同詩の制作の過程において、光太郎が、知恵子に関する作品を編集著作しようとし、或いは、右決意を契機として編集著作物に収録する意図のもとに同詩の制作に着手し、その制作と並行して、知恵子に関する作品の編集著作についての構想を練り、知恵子に関する自作の詩、短歌、散文を全て検討して取捨を決め、推こうし、各制作年月日を確定し、配列を決定したものと認定することは経験則に照らし合理的なものというべきであり、かように認定すれば、光太郎は時間的な余裕をもって作品の取捨選択等を行うことが可能であったということができると、第一番目の控訴理由について判示した。

第二点目の編集著作権者の認定については、「著作者が企画案ないし構想を提供する第三者の進言により、はじめて著作を決意し、その協力により著作物を完成するという経過をたどることは、決して稀ではなく、その場合進言をした第三者が当然に著作権者となるものではない。著作物をもととして完成される編集著作物について、第三者が進言した場合でも同様である。編集物で著作物として保護されるのは、『その素材の選択又は配列によって創作性を有する』ことが必要であるから(著作権法一二条一項)、澤田が「知恵子抄」の編集著作権者であるというためには、その素材となった知恵子に関する光太郎の作品を自ら選択し配列したと認められることが必要である。すなわち、澤田の編集著作と言うためには、「荒涼たる歸宅」のように後日制作された作品を除き、可能な限り、知恵子に関する作品全てを認識し把握したうえで、これら作品について必要な取捨選択を経て配列を完成するという作業が澤田自身によりなされることが何よりも先ず必要であって、それによつてはじめて控訴人らが主張する光太郎と知恵子の愛を浮き彫りにした創作性ある編集著作がなされたと認め得る余地があるのであり、かかる作業がなされないまま、光太

郎の作品の一部を集めても、それは光太郎と智恵子の愛を浮き彫りにするという編集著作という観点からは、企画案ないし構想の域にとどまるにすぎない(。)」と、澤田の主張する第一次案を企画案として位置づけ、控訴を退けている。⁽⁸⁾

(三) 最高裁判所判断

控訴審判決について、①旧著作権法一四条の要件検討を誤ったこと、②光太郎の行為をもって、「智恵子抄」の編集行為と認定判断することに理由不備、採証法則違反等の違法があるとして澤田が上告した。

最高裁判所は、「本件編集著作物である『智恵子抄』は、詩人である高村光太郎が既に公表した自らの著作に係る詩を始めとして、同人著作の詩、短歌及び散文を収録したものであって、その生存中、その承諾の下に出版されたものであることは、原審の適法に確定した事実である。そうすると、仮に光太郎以外の者が『智恵子抄』の編集に関与した事実があるとしても、格別の事情の存しない限り、光太郎自らもその編集に携わった事実が推認されるものであり、したがって、その編集著作権が、光太郎以外の編集に関与した者に帰属するのは、極めて限られた場合にしか想定されない(。)」と判断。澤田の上告は、棄却された。

(四) 最高裁判所判断と高裁判断の差異

最高裁判断では、「智恵子抄」の編集著作権者を光太郎とする根拠として、「その(光太郎)生存中、その承諾の下

に出版されたものである」事実、「仮に光太郎以外の者が『智恵子抄』の編集に関与した事実があるとしても、格別の事情の存しない限り、光太郎自らもその編集に携わった事実が推認される」(括弧内筆者)と、判断している。ここで示されている考え方は、収録される作品の著作権者が生存している以上、編集方針に従って作品群から取捨、選択する行為は、収録される作品の著作権にあるとの推定が作用するのが原則であり、「格別の事情」が存する場合にのみ例外的にそれ以外の他人に編集著作物の著作権を認めることができる、と収録作品の著作権の帰属に一つの基準を設けている。しかし、「格別の事情」が、具体的に如何なるものであるかを最高裁は判示していない。

控訴審判断を要約すれば、実際に、第一次案の配列・選択(一部であろうが)行為が澤田によって行われたとしても、それと、最終的な結果が完成品の配列と同一であっても、光太郎が、澤田の作成した第一次案を受領した後に、①作品の取捨選択等を為すことが出来る物理的な時間の存在、②第一次案で一部分のみが収録されていた作品を完全なものとしたり、表記を統一するといった不完全部分の補充、③各詩に創作年月日を確定して一部の詩の上にはそれを朱書き、④「智恵子抄」を締めくくべき作品「荒涼たる歸宅」の制作及び⑤それを含む収録作品の配列等の最終的決定をした等の事実があったと認められれば、そこに、光太郎の「智恵子抄」を編集著作しようとする意思決定を認めることは、「経験則に照らし合理的なもの」であると判断、その限りにおいて、澤田の第一次案は、企画案ないし構想の域を出るものではない、と結論している。それゆえに澤田の第一次案が創作行為として認め得なかった理由の裏には、全対象に対する検討不十分、という点を示唆したようにも読める。また、澤田の第二次案は、光太郎の創作行為が認められた時点以後のものであり、「婚姻の榮誦」と「淫心」が加えられているという程度では、そこに創

作性を認める根拠はない、としている。

ところで、控訴審判断と最高裁判断とは、編集著作物の著作権認定についてアプローチの仕方に若干の違いがあるように思われる。前者においては、編集著作物の成立する具体的創作行為一般の判断を経験則に委ねているのに対して、最高裁では、収録作品の著作者の「生存中」に編集がなされていた、というフィルターを前者判決に加え、そこにこそ原作品の著作者が関与していた事実を推認すべき、と判断している。この判断には、原作品の著作者による編集著作物創作についての具体的行為と共に、創作意図までも含めて、原作品の著作者が編集著作者であると推定される、という考えも含むのであろう。ゆえに、最高裁判断の示すところは、控訴判決よりも原作品の著作者に権利を認める範囲が広くなると読める。しかし、この最高裁判断によれば、原作品の著作者がいわゆる断筆のように一切の執筆活動を行っていない状況下での第三者の編集行為においては射程距離が及ばないことになり、編集著作者の認定は、具体的に示されなかった「格別の事情」にあてはまるかどうか、という問題となる。「格別の事情」としては、控訴審判断中の①から⑤の行為を含め、経験則上原作者以外の第三者を著作者と認めるのが不合理と考えられる事情一般を指すと解すべきであろう。従って、かかる控訴審判断に基づき編集著作権を判断することになると、原作品の著作者以外の者に編集著作権を認め易くなるであろう。

三、「智恵子抄」事件と「地のさざめごと」事件⁽⁹⁾

編集著作物についてかつて東京地裁から出された判決が、『地のさざめごと』編集著作物事件である。この事件は、

旧制静岡高校戦没者追悼事業の一環として、旧制静岡戦没者慰霊事業実行委員会によって編纂された遺稿集「地のさざめごと」の編集著作権帰属に関し争われたものである。原告は、同書の編集委員の一人で、全体の約三分の二の遺稿及び資料を収集・配列するといった具体的な編集作業を行った。作業に当たり、同委員会に報告を行っていたが、そこから指示や要請を受けていた事実はなかった。その後原告が同書の一般向け複製版を出版することを考え、旧版の内容に手を加え、読み易くする等の工夫を凝らした。ところが、原告作成の序文の内容をめぐり、出版者である被告との間で調整が着かず、被告が原告の序文を勝手に削除し、その代わりに被告側で作成した序文を掲載した。さらに、被告によって新たに作成された同書を「新版地のさざめごと」とし、その編集兼発行人として、被告の名前を記し出版されたため、原告が、自らの編集著作権の主張をしたものであった。

東京地裁は、以下のような理由で、「編集方針決定者」としての原告に編集著作権を認めている。それは、「素材について創作性のある選択、配列を行った者が編集者であると解すべきであることはいうまでもないところであるが、それにとどまらず、素材の選択、配列は一定の編集方針に従って行われるものであるから、編集方針を決定することは、素材の選択、配列を行うことと密接不可分の関係にあって素材の選択、配列の創作性に寄与するものというべく、したがって、編集方針を決定した者も当該編集著作物の編集者となりうるものと解するのが相当である。しかしながら、編集に関するそれ以外の行為、例えば素材の収集行為それ自体は、素材が存在してこそその選択、配列を始めるという意味で素材の選択、配列を行うために必要な行為ではあるけれども、収集した素材を創作的に選択、配列することは直接関連性を有しているとはいいい難いし、また編集方針や素材の選択、配列について相談に与って意

見を具申すること、又は他人の行った編集方針の決定、素材の選択、配列を消極的に容認することは、いずれも直接創作に携わる行為とはいいい難い（。）⁽⁹⁾ というものであった。ここでは、「素材の選択または配列によって創作行為を為した者」に編集著作権を認め、その者は、あくまでも創作性のある選択・配列をなしたものであり、実際の作業を行った単なる選択・配列者は除外される旨を確認した。

東京地裁の判断は、著作権法においてはアイデア自体は保護対象とはならない、との視点を編集著作物にもあてはめて、単なる企画者、提案者はアイデアの範疇で編集著作物に携わり、編集著作権者にはならないことを明らかにしているといえよう。この前提に立ち、「地のさざめごと」事件では、編集方針決定者が、編集著作権者と認定され得る、としている。とはいっても、この判決は、編集方針決定者は「創作性に寄与するもの」とし、「編集者となり得るもの」との表現を用い、制限的に編集方針決定者を編集者と解するものとしている。⁽¹⁰⁾ このことから、同判決は、編纂委員会への権利帰属を含め、編集方針決定者へ積極的に編集著作権を帰属させる趣旨ではないように読める。

この事件で示された判断は、前述の「智恵子抄」事件で示された判断とどのような位置関係にあるといえるのだろうか。編集方針の決定と素材の選択・配列を密接不可分とし、編集方針の具現化に編集著作物の創作性が認められる、との判断を示した「地のさざめごと」事件では、寄稿を中心としていることから、編集方針の具現化が易しいこともあり、編集方針決定者に、編集著作権を認めることが容易であった。これに対する「智恵子抄」事件では、原作品の著作者が生存し、なおかつ、素材としての作品を一人の著作者の作品に限定をしていることから、編集著作物に収められる既存の作品（原作品）が、編集著作物へ組み込まれるにつき、元のままの姿を保持し続けるとは考えられ

ない、との前提が同事件の最高裁判断に含まれていると考えられる。それゆえに、澤田の行為を履行補助者あるいは編集補助者としての地位しか認めておらず、編集方針決定者としても認めていない。

両判例からは、言語の著作物を基に編集著作物を作成しようとする場合にはそこに内在する特質により、編集者と原作品の著作権者との関係は方針決定という観点から考慮しなければならない、ということであろう。具体的には、編集者が原作品の著作者である場合には、編集著作権が原作品の著作者と推認され、この推認は、おそらく原作品の著作者が一人でかつ生存中になされた、というのであれば、より明解になる、という判断を示し、それ以外の場合には、従来の編集行為を具体的に検討しなければならない、という結論になるだろう。この点で原作品の著作者の編集行為への関わりについて、一つの指針が導かれよう。ではこのことを、編集著作物の特質から、その妥当性の検討を行う。

四、編集著作物の特質

編集著作物は、そのものの創作性の問題と原作品の編集著作物への利用問題とに区別して考察されなければならない。原作品を編集著作物へ利用する場合には、利用についての原作品の著作権者からの許諾の必要性の有無、利用の際の利用形態、原作品はどの程度まで忠実に利用されなければならないか、という同一性保持権の問題が生じる。以下、順次考察を加える。

(一) 編集著作物成立に関する旧法と新法の差異

編集著作物を作成するために原作品を利用する場合、原作品の著作権者から利用許諾を受けることを成立要件とするか否かで、昭和四五年に改正された現行著作権法（以下、「現行法」とする。）とそれ以前の旧法との間で、捉え方の相違がある。

編集著作物の成立要件について、旧法一四条は「数多ノ著作物ヲ適法ニ編輯シタル者ハ著作者ト看做シ其ノ編輯著作物全部ニ付テノ著作権ヲ有ス」と規定していた。同条の「適法ニ」とは、原著著作物の著作権者の許諾を意味し、編集著作物の作成には、異種複製の場合同様に原作品の著作権者の同意が必要であった（「適法要件」と呼ばれていた）。現行法は、編集著作物の成立要件から、適法要件を削除している。その理由としては、旧法において他の二次的著作物に適法要件がなかったことから、編集著作物についても均衡をとろう、という趣旨によるものであった。このような改正過程から、編集著作物作成時には、現行法において適法要件は必要ない、とするのが通説である。⁽¹²⁾

通説の考え方によると、現行法は原作品を編集著作物へ収録する際の適法要件とは別に、編集著作物を出版等を通じて利用する際には、原作品の著作権者への利用許諾が必要であるとされる。編集著作物の権利発生要件と権利行使要件とを区別することによって、原作品の著作権者に無許諾な編集著作物の利用が制限されるというものである。現行法が許諾を権利行使要件とすることの効果は、原作品の著作権者から承諾を得られなかった編集著作物であっても、自らの著作物が第三者によって無断に作成（出版）された場合には、著作権侵害の責任を追及できる点にあるとされる。⁽¹³⁾

編集著作物を創作しようとする編集者が原作品の著作権者に求めるところの利用許諾としては、一般に出版といった有形的利用に対する複製許諾が予想され得る。しかし、この利用許諾も、具体的にいかなる編集行為まで許容されるのか、という点については問題がある。複製の意義としては、最高裁の昭和五三年判決によって、「著作物の複製とは、既存の著作物に依拠し、その内容及び形式を覚知させるに足りるものを再製することをいうと解すべきである⁽¹⁴⁾」と、二次的著作物までを含めて広く複製と解されるような判断が出されている。複製を編集著作物作成の編集行為に絞るとすれば、編集著作物の成立要件に独創性としての「素材の選択・配列」が要求される以上、素材たる原作品は、そのまま複製されて利用されることが本義であろう。しかし、「内容及び形式を覚知させるに足りるもの」もまた、複製に含まれることからすれば、ある程度原作品への改変が認められ得るということも予想される。そして、そこには一種の二次的著作物としての編集著作物というものが発生しよう。また、複製による利用許諾を広く解したとしても、著作者人格権であるところの同一性保持権の侵害を免責する許諾としての意義はないこと⁽¹⁵⁾から編集行為自体の限界が同一性保持権の視点から問題となる。

(二) 編集者の編集行為の限界

編集著作物に著作物性が認められるのは、素材の選択や配列が独創性を有する場合である。これは、編集者の編集意図に基づくことは当然であるが、編集意図自体を編集著作物から判断するのは、特に文学作品の場合きわめて困難である。理論上、編集意図は内面的・内容的な組成方法としてのコンポジション（composition）といわれるものと

して把握され、最終的に完成した外形上素材が選択・配列された後の編集著作物の保護とは、区別されるはずである。しかし、両者を具体的にどのような点で線引きするかは、不鮮明であるのみならず、創作性を表現された編集著作物より客観的に判断しなければならないことから、場合によっては、内面的・内容的な組成方法も保護され得ることになる。⁽¹⁶⁾ 編集者が自らの編集意思を実現するために原作品についてなんらかの変更を加えなければならないときがある。これが、同一性保持権の問題として編集者の編集行為を制限するものと現れる。

著作権法は、「著作者は、その著作物及びその題号の同一性を保持する権利を有し、その意に反してこれらの変更、切除その他の改変を受けない」(二〇条一項)と同一性保持権を著作者固有の権利として規定し、その権利の例外として同条二項に規定される一定の要件を満たす場合以外は、常に著作者に保持される。同一性保持権を制限する「著作物の性質並びにその利用の目的及び態様に照らしやむを得ないと認められる改変」(同条二項四号)は、当該著作物の著作者の許諾無しに認められる。それゆえに、編集著作物への収録の際に原作品をどの程度改変することがやむを得ない改変と認められ、原作品の著作者の意に反する改変とはいかなるものかが問題となる。

編集著作物に関連して二〇条が争われた平成三年一月二十九日の東京高裁判決では、二〇条一項について「著作者がその意に反して著作物の外面的表現形式に増減変更を加えられないことを意味するもの」と解したうえで、二項四号の「やむを得ないと認められる改変」に該当するためには、利用の目的及び態様において、著作者の同意を得ない改変を必要とする要請が、同項一号及び二号の場合と同程度に存在することが必要であると解するのが相当である」としたうえで、大学内の懸賞論文の応募論文について、実際に行われた改変の中で、明白な計算上の誤りはやむを得

ない改変と認められ、送り仮名、読点の使い方などの表記方法に関する変更及び改行の省略は、外面的表現形式の増減変更に当たり、同項一号及び二号と同程度の必要性とは認められず、同一性保持権の侵害に当たると判断している。⁽¹⁸⁾ また、旧法時代ではあるが、論文の趣旨を歪める加除、変更を加えたことが同一性保持権の侵害とされた事例もある。⁽¹⁹⁾

これらのことから、編集著作物へ原作品が収録される場合に、一項に基づいて極端な場合、単純な誤字脱字の訂正以外は、原作品の著作者の意向に添わねばならず、原作品の著作者が強引な旧仮名遣い論者であれば、編集著作物においても収録著作物の一字一句たりとも改変が許されなくなる。⁽²⁰⁾ 編集をなさうとする者の編集意図にしたがって、改変が起る場合としてはさらに、原作品に何等かの補正や削除がなされる場合、また、原作品の一部分の削除、要約において作品を収録する場合、さらには、題名の変更や題名のない著作物に題名を付したり、小見出しを付けたりする行為が考えられるものの、大部分が原作品の著作者の同意なくしては、同一性保持権の侵害となり得る可能性を秘めている。編集行為においては、既に公表済みの物を編集する場合と未公表の物を編集する場合では慣習上の相違があるともされるし、シリーズ物のような場合は、全体を形式、体裁を整える都合上かなり改変の認められる範囲が広くなる。⁽²¹⁾ 最終的にどの範囲までやむを得ない改変として認められるかは、編集者と原作品の著作者といずれに保護の重点を置くか、という問題というよりも、被収録作品の著作者の意思如何に関わることとなる。したがって、原作品の著作者の権利を制限する二項四号の規定については、斉藤博教授によって「多義的な不確実な表現が含まれているだけに、その解釈、適用に際しては十分に慎重でなければならぬ。」⁽²²⁾との指摘があるように、二〇条二項四号を

限定して考えるのがよからう。⁽²³⁾ このことは、編集著作物にとっては、特に利用の際に原作品の著作者から得た許諾の範囲を黙示的にあるいは、類推によって広げることをもなくすためにも重要である。

編集者の編集意図に従った編集行為において、「やむを得ない」と認められない改変であつてもそこに原作品の著作者による承諾があれば有効に認められる。これは、既に述べたように、編集著作物作成の際、原作品を収録することについての許諾とは区別され、創作時に後者の許諾を得る必要がないとしながらも、同一性保持権侵害を構成する部分については許諾が必要となる、といった複雑な法律関係が編集著作物には発生することを意味する。この様な二重の法律関係を考慮しなければならない編集著作物として、寄稿集を編纂する場合が考えられる。寄稿集への原作者がなす投稿自体は、原作者が与えた編集著作物への利用許諾と考えられ、編集者が二〇条二項四号を越えた改変をする際は、寄稿者の意に反した改変により本来その作品が意図しなかったものとして編集がなされうることを防御する手段として、原作者は衣然として同一性保持権を留保することは、実際有益であろう。この場合の改変は、外形的に現れている部分の削除改変に限らず、原作品と収録された作品とを読み比べて、読者が、原作品の筆者の同一の思想が読み取れない場合、時には、編集意図と原作品が明らかにそぐわない場合も含まれるであらう。⁽²⁴⁾

編集者の編集行為における創作性と同一性保持権との関係から「智恵子抄」事件の判断を考えると、原作品の著作者である光太郎は自ら原作品への加筆、補完を行っている。編集行為の中の同一性保持権の限界を誰が破ることができるか、という問題に対する解答を導き出そう。つまり、既存の作品を中心に未完成なものも含めて、収集、配列した物に編集著作権を取得しようとした澤田にとって原作品の著作者が生存し、その者が編集に携われることは、同一

性保持権という破れない障害をつくり、もはや澤田の編集行為の範疇を越えざるを得ないものが含まれている。このことは、原作品の著作者の作品を編集しようという「智恵子抄」のような場合に、如何なる者をして原作者光太郎以外にはそれを編集することが不可能であるという結論を導く。

(三) 二次的著作物としての編集著作物

編集著作物は、素材の選択や配列に創作性が認められる場合に原作品の保護とは関係なく、別個独立の著作物として著作権が認められる(一二条一項)。⁽²⁵⁾ かつて、旧法時代には、著作物の二次的発生原因として、著作物の翻訳や編曲等と同じ範疇において考えられていた。現行法では、二次的著作物を他の著作物に依拠しつつ創作された派生的な翻訳、編曲、変形、脚色、映画化、その他の翻案行為により作成された著作物(二条一項一―号)と定義(以下、本稿では、便宜上「翻案著作物」とする。)し、その範疇から編集著作物を除外するものと考えている。このような改正がなされた理由には、ベルヌ条約において編集著作物を二次的著作物とは別に規定してあることと、両者に創作性が認められる根拠に差異があることなどが挙げられる。具体的には、編集著作物は、そもそも素材としての著作物の選択と配列を問題とし、原作品を根本的に改変することを前提としていないの⁽²⁶⁾に対して、翻案著作物では、本質的に原作品と異なったものを作成することを目的としている。既に述べたように、根本的に改変することを想定しない編集著作物にとっては、原作品との間で同一性保持権の問題が生じる。また、編集著作物作成に当たっては、原作品の著作者の許諾が必要ないとされる点も両者の差異といえよう。

完成した著作物を利用する際にも、編集著作物と翻案著作物とは差異がある。後者を利用するには翻案著作権を有する者の承諾のみで可能であるのに対して、前者は、原作品の著作権者と編集著作物についての著作権者とで、別個に権利処理を考えなければならない場合がある（二八条）。しかしながら、両者には、既にある著作物を利用して著作物を新たに生み出すという点において同類の要素が考えられ、広く二次的著作物として範囲が重複する部分が生じる。しかし、単なる事実を素材として選択、編集した編集著作物の場合には、二次的著作物という概念はあてはまらない。⁽²⁷⁾

編集行為の中には、編集著作物全体にわたる編集者の独創性が備わる場合もある。それは、詩集などの作品集に顕著と思われるが、個々の詩歌自体の意味を全体の流れから、表現形式を変更するという点である。これは、原作品の内容を変更せずに行われる行為であることから、翻案行為といえることができる。しかしながら、その一方で全体の位置づけから外形的な表現は同一であっても、汲み取られるべき印象は、全く異なる場合が発生する。それゆえに、文学作品の編集、特に詩集には、翻案を含みながら同一性保持権の限界を破ることになる。もはや、そこには本来の編集著作物としての意義は存しないのではないか。では、どの様に考えることによってこれらの問題を解決するかとすれば、翻案著作物類似の編集著作物という考え方ができるのではないか。これは、原作品の著作者が、既に作成済みの詩歌を新たな詩集へ組み込む際に、それなりの変更を加えることに着目すると翻案に当たり、他の作品とともに選択・配列がなされることから、編集著作物に該当する。そして、完成した編集著作物が、詩集全体の流れの中で、収録された既存の詩歌それぞれが互いに内容を強調したり、新たな内容を加えたりすることから、それ自体新たな著

作物であり、翻案著作物類似の編集著作物という表現が可能となろう。この考え方は、編集の際の改変に関わる原作品の著作権者との複雑な権利関係を単純化すると共に原作品の著作物を集めた作品集については、一四条の著作者推定規定を働かせることだけで、当該作品集を利用するものに権利処理の利便を与えることができる。著作者の推定に関する一四条の規定は、編集者も編集著作物について新たな著作権を取得するという点でその推定を受けることにもなり、このような推定規定は、寄稿集のような場合にはより効果があろう。⁽²⁸⁾しかし、「智恵子抄」事件のような場合にまで、編者という表示の一字をもってして編集著作権者と推定することまでもここに含めるかという点、その様々な編集行為から疑問となる。⁽²⁹⁾従って、光太郎の作品を集めた詩集が光太郎の生存期間中に発行をされた、という事実から光太郎の関与が推認されてしまうことと合わせ考えると「智恵子抄」事件の判決自体は、妥当な結論といえよう。

五、まとめ

今まで、「智恵子抄」事件を中心に編集著作物における編集行為の限界を種々指摘してきた。これらのことから、「智恵子抄」のように編集著作物に収録される原作品の著作（権）者が生存期間中にそれらを集めて新たな編集著作物を作成するような場合、当該原作者以外の第三者が編集をしようと試みると、編集行為は、きわめて限定された範囲でしか行うことができないと同時に、原作品の著作権者との法律関係が複雑なものになることが理解された。従って、編集著作物の著作権を決定するに当たっては、編集行為との限界から、原作品の著作権者と編集者が同一人に帰するという場合、出来上がった作品集自体を一種の翻案著作物類似の編集著作物として把握し、翻案著作物類似の編

集著作物としてその権利が原作品の著作権者に単一に帰属するという判断基準ができる。そのような判断基準を置くことは、光太郎自体を翻案著作物類似の編集著作物の著作権者と推認する根拠としての理にかなうものであるし、作品集といった原作品をそのまま編集する編集著作物に限らず、要約集の類をも含め、同一性保持権の問題や複雑な許諾関係を解消することもでき、保護期間についても何等問題が生じないと思われる。しかし、このような基準を置いた場合であっても、翻案がなされた著作物が具体的に何であるかを把握することは困難であろう。だが、現行法上では多少無理であるかもしれないが、同一作者の作品を集めている以上、集合体としての光太郎の作品群を被翻案著作物として把握することで解決できるであろう。

翻案を含んだ編集著作物の権利者特定について一応の判断基準ができたとしても、いくつかの問題点が残る。一つには、編集作業中に、原作者が死亡した場合にその後編集行為を引き継いだ者が、編集著作物を完成させた場合と、原作品の著作権者と編集行為を補佐していたものが、途中で意見の食い違いを生じ、別途独立して編集行為を進め二種類の編集著作物ができた場合の各々の編集著作物の権利帰属の問題である。どちらも、原作者≡編集著作物という構図はそのままではあてはまらない。前者の場合には、著作物成立の一般原則にたちかえり、死亡時点での編集著作物の完成度に応じて、原作者か後続の編集行為者（完結者、多くは、編集補佐をなしていた者であろうが）かに権利帰属させ、場合により両者の共有ということも生じよう。後者の場合には、原作者の関与して完成された編集著作物については、原作者≡編集著作権という構図をあてはめ、分離し完成した他方の編集著作物については、分離した側に編集著作権が帰属する、と考えられよう。⁽³⁰⁾

以上、言語の著作物を収集した編集著作物における特殊な事例についての著作者判断基準を考えてきたが、このような考え方は、情報通信化社会としてのマルチメディアにおいても一石を投じるものと思われる。それは、一定の範囲におけるネットワークにおいて加入者同士が、双方向性メディアによって、その中の一人の作品あるいは、特定のテーマ（この場合は、単なるテーマではない）を中心に順次様々なストーリーを付加・展開していったり、挿絵を加え作品を完成される場合である、当初示された主題から逸脱しない限り、それら全体を翻案著作物類似の編集著作物として扱い、第一番目に発生させた著作者を権利者とすることで権利関係が単純化し、完成著作物の利用許諾を取り易くさせる、といった可能性へと展開できるのではないか。新たなメディアとの詳細な問題検討は今後の研究において明確にしていきたいと思う。これまでの研究成果について大方の御批判を賜れば幸いである。

注

(1) 明治三二年施行の旧法では、現行著作権法二条一項二号のように著作者一般を定義する規定は存在しなかった。しかし、旧法においても著作権の主体は、「著作物の作成者」と包括して解されていた（山本桂一『著作権法』（法律学全集54Ⅱ）有斐閣、昭四四年、五〇頁。榛村専一『著作権法概論』巖松堂、昭一一年、三七頁）。旧法一四条において、編輯著作物の著作者については「編輯シタル者ハ著作者ト看做（す）」と規定し、そのものの定義については「一定の指針または体系の下に……素材の選択または配列によって創作性を取得し（山本・前掲書二三〇頁）」たものと認定していることから、現行法と何等変わるところはない。

(2) 編集著作物の著作物性が争われたものとしては、訟廷日誌事件（大審判昭一二、一一、二〇、評論二七巻諸法二〇六頁）、地球儀用世界地図事件（東高判昭四六、二、二、判時六四三三九三頁）、広告電話帳事件（大地判昭五七、三、三〇、判タ四七四号二三二頁）、アメリカ語用語集事件（東地判昭五九、五、一四、無体集一六巻二号三一五頁）などがある。

編集著作物における編集著作者認定の一基準（五味）

(3) 「神雷部隊の歌」と「戦友の唄」の歌詞及び楽曲が近似するものとして、原告の創作ではないと判断されたもの（東京地判昭五八年六月二〇日 判時一〇八三号一四三頁）、「チューリップ」の曲及び歌詞について、原告の著作権を否定した事例（東高判平二年二月一八日 判時一三七六号一〇七頁）、「テフテフ」、「タンポポ」等の各詩について著作権が認められた事例（東京地判平元年八月一六日 無体集二二巻二二六頁）など創作自体が古いゆえに著作者がはっきりしなかったという事例の他に、S M写真集に連載されている写真の著作権について、カメラマンに著作権が帰属するとされた事例（東京地判昭六一年六月二〇日 判タ六三七号二〇九頁）やデータベースについて大学教授に著作権が認められて事例（大阪地判平三年一月二七日 判時一四四一号一〇四頁）といった利用関係の紛争から発生した事例などがある。後者の事例は、今後多く現れることが予想される。

(4) 昭和六一年の改正において、データベース著作物については、一二条一項からは除外されている。ここでは、詳しく言及することを避けるが、本件のような文学的著作物とデータベースとはそもそも性質を異にするものである。つまり、前者には、編集段階で、個々の著作物に必要に応じて手が加えられることもあろうが、後者は、そのままの情報がその価値全てであるからである。

(5) 最判平五年三月三〇日 判時一四六一号三頁。控訴審判決は、東高判平成四年六月二七日 知財集二四巻一号一二頁。一審判決は、東京地判昭六三年二月二日 無体集二〇巻三三五四四頁。それぞれについての評釈としては、第一審判決について小泉直樹・法学教室一〇五号九二頁、控訴審判決について、阿部浩二・判時一四二四号一七六号、最高裁判決について、阿部・平成五年度重要判例解説二七四頁、尾中普子・著作権研究二二巻一三三頁などがある。

(6) 昭和一六年に完成した『智恵子抄』は、旧著作権法時代のものである。従って、旧法における編集著作物成立要件を満たしていることが前提となる。編集著作物の保護期間については、旧法では編集著作権者の死亡後三八年間とされていた（旧法三条に関する同法五二条一項の特例による）。高村光太郎が編集著作権者であれば、彼の死亡した翌年の昭和三二年一月一日より、平成七年の末日までが保護期間となる。しかし、昭和四五年の著作権法全面改正によって、保護期間が著作権者の死後五〇年に延長され、昭和四五年の時点で、光太郎の編集著作権が存続していた『智恵子抄』は、著作権法附則二条一

項より、平成一九年の末日まで保護期間が延長されている。また、澤田伊四郎が編集著作権者であれば、彼の死亡が、昭和六三年であることから、『智恵子抄』についての編集著作権は、平成五〇年に消滅することとなる。

(7) 本稿においては直接関連がないが、地裁の段階において、著作権登録が問題となってもいる。それは、当初、龍星閣のみから出版されていた『智恵子抄』が、好調な売行きを示したため、光太郎から許諾を受けた他の出版社でも、『智恵子抄』が出版され始めていた事実に端を發しており、それを不満に思う澤田が、自らを編集著作権者とする著作権登録を行った。このことが、今度は、光太郎の遺族の不信感を買って同登録の抹消を求めると共に、澤田との出版契約を解除する争いとして浮上し、本件提訴になっていった。

(8) この他に澤田は、予備的請求として、編集著作権が認められないとしても、編集経過からみれば、自らに編集著作物について編集著作権の共有持分二分の一があることも主張した。この点についても、「澤田の行為は編集著作権としての行為ということはできないのであるから、右主張も採用することはできない。」と、退けている。

(9) 東地判昭五五、九、一七、無体集一二巻二二四五六頁。この事件の主たる争いは、出版者が元の遺稿集にあった序文を勝手に被告の序文とすり替えたことについて当該出版者にどのような過失があるか、という点にあった。

(10) 地球儀用世界地図事件（注一参照）では、「作成を指示した指図者」を以て編集著作者であるといった判断のなされたが、編集著作物が地図という性質上、実際に作成される行為は、機械的かつ技術的範疇に属するものとなるからであろう。

(11) 山本・前掲書六四頁及び二三三頁。

(12) 現行法については、尾中「久々湊」千野「清水」『改訂著作権法』学陽書房、平四、一四九及び一五八―一五九頁参照。旧法時に執筆された山本教授も、改正案（現行法）で、適法要件が削除されている点に関して、ベルヌ条約との関連から、原著作権の許諾がなくとも二次的著作権は成立する、と述べられている。山本・前掲書六五頁。しかし、半田正夫教授は、現行法12条においても、適法要件が必要であり、それを欠く場合には、著作物の成立自体が否定される、とされる。半田正夫『著作物の利用形態と権利保護』一粒社、平元、一六五頁。

(13) 加戸守行『著作権法逐条講義（改訂新版）』著作権情報センター、平六、一〇一頁。

- (14) 最判昭五三年九月七日 民集三二卷六号一一四五頁。
- (15) 最判昭五五年三月二八日 民集三四卷三号二四四頁参照。
- (16) 尾中・前掲評釈一三四頁、中川善之助『阿部浩二編『著作権』(実用法律事典一〇)第一法規、昭五二、五六頁参照。この点においては、本来著作権法が有していた、内面的形式は保護の対象とならないとする考え方に制限を加えるものとなる。このことはまた、編集意図そのものには重点を置かないことを示しているともいえよう。
- (17) 東高判平三年一月一九日 知財集二三卷三号八二三頁。この事件の控訴審判決は、一審判決より「やむを得ない改変」の範囲を狭めている。
- (18) 編集著作物に原作品を収録する際には、既存著作物に重大な変更を加えることなく行われるべきである、との考え方は、編集著作物について我国とほぼ同じ定義規定をもつ合衆国連邦著作権法についてもあてはまる。デイビット・A・ワインステイン著、山本隆司訳『アメリカ著作権法』商事法務研究会、平二、三七頁。
- (19) 東京地判昭四七年一〇月一日 無体集四卷二号五三八頁、同控訴審である東高判昭五五年九月二九日 判時九八一号七五頁も同趣旨。
- (20) 加戸・前掲書一三八頁参照。
- (21) 尾中他共著・前掲書一六七―一六八頁参照。
- (22) 齊藤博『概説 著作権法』一粒社、昭六三、一〇二頁。
- (23) 近時、マルチメディアとの関係から、同一性保持権を制限すべしとの意見が多く出される傾向にある。著作者のむやみな同権の行使は、厳に慎むべきであるとしても、一般論としては、同権に制限を加えることについては慎重であるべきと思われる。また、制限の根拠として、著作権法一条の目的規定をもつてくることにも疑問がある。後日詳述する。
- (24) 言語による著作物の場合には、翻訳の場合にも生じる問題であるが、内容についての無謬性というものは認められない。特に、収録作品が極めて抽象的な内容の作品の場合には、それが言えるし、不確実な事実に基づくような作品においても同様である。この場合には、同一性保持権による防御作用を制限してもよいと思われる。

(25) 山本・前掲書六四頁参照。

(26) 前掲書二三四頁。

(27) 半田正夫『著作権法概説〔第六版〕』一粒社、平五、一〇八、一〇九頁。そもそも、「二次的著作物」という表現自体が適切であるかどうかという問題もあろう。合衆国著作権法が「derivative work」と表現するように、「派生的著作物」という表現の方がより適切であると思われる。この方が、二次に続いて三次、四次となった場合に、その都度、条文の読み替える必要がないことから都合がよいであろう。尾中共著・前掲書、四九頁参照。

(28) この場合に、法人に著作権が認められるかという問題も当然そこに含まれるが、法人と推定することにも意義を有することになる。ここでの詳述は避けることにする。

(29) 編集著作物の場合には、一四条における「著作物の公衆への提供」方法の中で、編集著作者と推定することを意味しようが、「智恵子抄」事件のような場合には、収録される原作品に編集著作権者も表示される、との点に一四条の趣旨を読むことが可能ではないか。

(30) この様に解する場合でも、注意を要すると思われるのは、分離したきっかけが、編集意図をめぐるものである場合である。単に、権利関係の処理問題や私的感情のもつれ、さらには、単なる嫌がらせのようなものはここには当然含まない。また、分離して完成した編集著作物自体が類似のものであったとしても、両者は、別個の保護を受けるということで、裏にあるところの内容的表現についても保護を受ける結果となる。

(なお、本稿において一部旧字体を新字体に改めた。)

完